

#### よい語り わるい語り 4 タイトルはあまり言いたくない

いずれにしろ、当日の話のタイトルを事前にチラシに書くことはしたくない。自分の選択肢をあらかじめ、しばってしまっていていいことはないからだ。

自分からタイトルを出すのは、有料で、かつ、ぼくの話聞くのが目的で来てくれる人が多い会＝独演会のときくらいだ。

これは「この日はなにがなんでも、この話をしよう」と先に決めてしまって、自分の退路を断ってしまう意味がある。

そうしておかないと、怠惰なぼくは時に新作や大ネタに取り組むことから逃げたくなってしまうことがあるからだ。

新しい話は、ステージで話してみて初めて（ここは説明がたりなくてわかりにくかったかも）とか（語りだしが一呼吸早かったかも）とか（今のギャグはいらなかったかも）とか気が付くことがたくさんある。

それは当たり前のことで、そのあと、改良を重ねて落ち着くところへ落ち着いていくのだが、（いずれ、もっとよくなるのに）と思っている未完成な話を、出たところ勝負で語るのは勇気と気合がいる。

壁に向かってしゃべってうまくいけそうだった話が、大勢の前でしゃべってみたら全然だめだったというケースは何度も体験している。

その時点で完成のつもりでいても、過去の多くの例がどうせ改良点が出てくることを示しているのだ。

だから、ついつい、お披露目は先延ばしにして手慣れた話をしてしまいたくなる。何十回、何百回も語ってきた話ではもう一字一句動かないものもある。

別に書いた話を暗記したから動かないのではなく、自然に語っていて気持ちのいい言い回しだけを残していたら、自然にそうなったのだ。

そういう話ならステージ上でジタバタしなくてすむし、当然、完成度は高い。初めての町や学校でのものがたりライブなら、その話の方がいい。

だが、一方で自分の世界を広げるためにはそれだけではなく常に新しい話に挑戦しなければいけないのもわかっている。そこで自主公演では「新作語りおろし・タヌキのたからばこ」とか、話がすべてできあがっていなくてもだいたいの見当でタイトルだけ先に決めてチラシに入れたりする。

夏休みの宿題のようにメ切を自分に課して創作の苦しみを受け入れるようにしている。自主公演ではそういうこともする。

だが、あとは基本的にぼくを呼んでくれた主催者から「チラシに載せたいので、当日の話のタイトルをお知らせください」と尋ねられてもあまり言いたくない。

タイトルではなく「おばけ話があります」とチラシに入れてもらうことはある。  
「それなら行きたい」という人も大勢いるが  
中には「それなら絶対行きたくない」という人もいるからだ。  
話題性だけでなく、ある意味、必要な情報かもしれない。

そして、こう書いてくると  
改めて、事前にタイトルを情報として流す意味を考えてしまう。  
これが古典落語の噺家の独演会なら、落語通のお客の視点で言うと  
好きな話とそうでない話があるから、タイトルを見てその会に行くか行かないかを  
決めることはある。

ぼくも、落語会に行くときは  
基本は「誰が語るか」で選ぶが、たまに珍しい話が  
タイトルに入ると、「その話は知らないから行ってみようか」と考えることはある。

だからタイトルをだす意味がまったくないわけではない。  
だが、落語はナマを楽しむ大人の多い世界だが、親子で聞くものがたりの会で  
、タイトルを見て「その話ならいっしょに聞きに行こう」と考える人が  
どれだけいるだろうか？

とはいえ、主催者は良かれと思ってタイトル出しを求めてくる。  
だから、それが集客につながるかどうかはわからないとしても、  
争う気はない。

そこで「ひつじ他」ぐらいにしてもらって、手をうつ。  
「ひつじ」はぼくが名刺替りによくする話で、それを最初にやって  
客席の反応を見たらうえで次の話を選ぶことは多いから、まったく問題ない。

もうひとつ、タイトルはあらかじめ言わない方がいい理由がある。  
そもそも、なんの話になるのか知らない方が、どんな展開になるのかわからなくて  
わくわくしながら聞けるということがある。

タイトルをださなくとも、ものがたりに詳しい聞き手なら、聞きながら  
(あ、あの話だな)と自然にわかっていく。

「昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがいました」と始まった話が  
「ももたろう」になるのか「したきりすずめ」になるのか「はなさかじいさん」に  
なるのかは、聞きながらのお楽しみだ。  
五条の橋の上で弁慶の前に現れる稚児の名は、話の中で明かされればいいので  
最初から教える必要はない。

もっというとタイトルがネタバレそのものという場合すらある。

「つるの恩返し」はタイトルを知らなければ、  
初めて聞く人は(え、この女の人はおもしろい)と  
さっき助けてあげたツルなのかなあ)とミステリアスなムードを  
ドキドキしながら楽しむことができる。

だが、タイトルを先にだすことがその楽しみを奪ってしまうのだ。

おそらく、もともと昔話や伝承にタイトルなどなかった。

あってもせいぜい「つるの話」とか符牒程度だろう。

それを採集した人たちが分類して整理するときにつけたタイトルが  
独り歩きしてしまったのだと思う。

チラシには書いてなくとも

出てきて初めに「〇〇と言う話をします」などと言うてしまう

語り手は多い。

これも同じことだ。

寄席で最初に「〇〇という落語をします」などと言って

話し始める噺家はいない。

あくまでも語りの主導権は語り手の側が持っていたい。

それを承知で、語り手のてのひらにのせられるのを楽しむのが

聞き上手な客というものだ。

最初に手の内を明かして得になることはなにもない。